

## 第 47 回「全国漆器展」審査講評

～ 受賞作品一覧 ～

審査委員長 大西長利

漆業界はこれまで経験したことのない、ITによる世界革命の中にあって、最も高度な手技を誇ってきた漆文化の未来は、たいへん厳しい状況におかれています。なんとしてもこの日本民族の宝を、活力を持って未来に前進させることを、全身全霊をもって考究しなければなりません。

漆ほど人間にとって優しい素材はありません。この天賦の恩恵を日本人はまさに忘れようとしています。先ずこれを食い止めなければなりません。ひとりひとりの日々の暮らしに漆器があることです。この認識の大切さを多くの人々に呼びかけることです。

さて今回の第 47 回全国漆器展の開催並びに審査にあたり、今の状況打破のための一歩でも半歩でも力強い前進を期待して審査をいたしました。伝統の底力、各産地に息づく漆への情熱と希望が一つ一つの作品ににじみ出ていて感動しました。以下、10名の審査委員を代表しまして、受賞作品について簡単ですが講評を記します。

### 『審査風景』





農林水産大臣賞  
[帯付小判重]  
津田 哲司(輪島)

丸みのある長手三段重ねのお重は、従来の見慣れてきた重箱の概念を大きく払拭した造形を見せている。朱漆と黒漆の縁取りの構成からなり、朱漆塗面の素彫り文様が器形に密度と優雅さを醸成している。重箱の隅をつつくとという言葉に象徴される堅苦しさはなく、豊かさや楽しさが盛りあがりそうだ。



林野庁長官賞  
[縄胎蒟醬線文盛器φ40]  
西岡 春行(香川)

朱漆による円面の色調が漆器特有の魅力を強く打ち出していて、黒漆による縁取りと見事な調和を生み出している。細い縄目の地紋が仕上がり面の全域に波状をやわらかく浮きあがらせ、高度な技術力と相俟って見事な作品となっている。



日本経済新聞社賞  
[乾漆蓋物]  
大上 博(東京)

乾漆技術の特色を存分に生かし、器胎のやわらかい造形は、たいへん魅力的である。縁取りの輪花も神経質にならず、ゆるやかな動きを示し、全体の朱漆仕上げにやわらかい陰影をかもし出しているすばらしい。



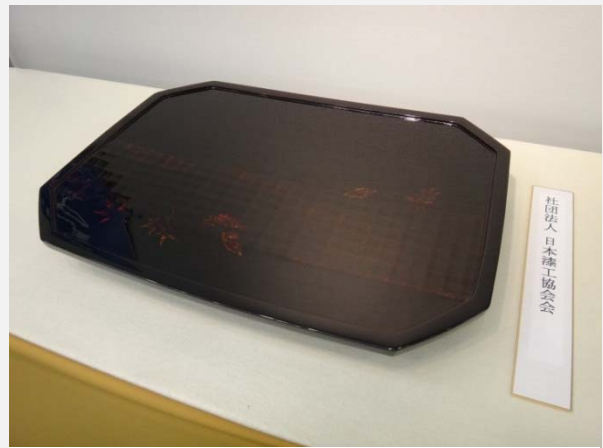
一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会賞  
[三段重 桜模様]  
石岡 幸枝(青森)

従来の重箱の形式をふまえながら、要所に微妙な造形感覚を組み込み、さりげなく力を抜いている所にこれからの可能性を感じる。津軽塗り(ななこ塗り)の繊細かつ手堅い塗り技術による地塗りに桜の花文を散らした試みは成功している。



全国漆業連合会会長賞  
[薄挽煮物椀 千筋 塗分]  
小原 篤志(山中)

挽物技術の伝統を誇る山中漆器ならではの  
見事な煮物椀である。一見地味に見えるが、これが  
本当の滋味ではないだろうか。蓋を取った時の美味  
が秘められている。黒漆塗りと木地仕上げとのバラ  
ンスがゆったりとした気分を生み出している。



社団法人日本漆工協会会長賞  
[パーティー用盛り込み台(胴張・角切)]  
杉本 定秋(越前)

塗り立てによる黒漆の魅力を存分に表現した作  
品で、大きく角切りをとった全体のバランスは大ら  
かでゆったりとした気分を味わうことができる。大  
げさな模様を抑えたところが、盛られるであろう山  
海の珍味を想像させて楽しくなる作品だ。

『 日用品部門 』



経済産業大臣賞  
[テーブル折脚 風紋(ふうもん)]  
森 康一(香川)

題名が示すようにさわやかな風を感じる作品であ  
る。テーブル・トップの卓越した仕上げ技術と漆の  
色調が味わい深い趣と品格を表した秀作である。用  
に基づく折脚の工夫も考慮され、落ち着いたなかにも  
軽快さがあり、室内空間の演出にも一役かいそう  
である。



経済産業省商務情報政策局長賞  
[上置型仏壇 黒朱呂色]  
城取 一郎(木曾)

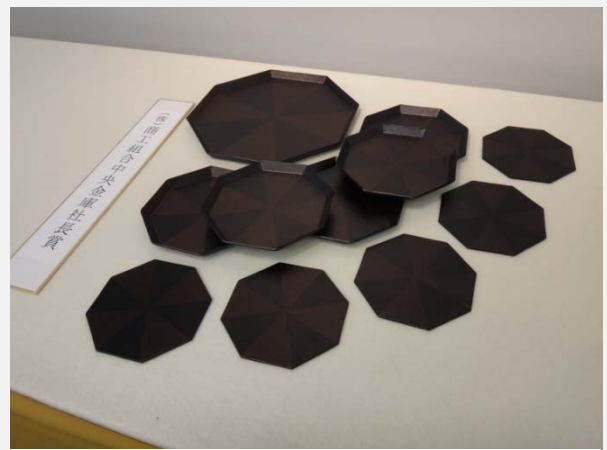
新しい時代の中で、仏壇のあり方が色々と研究模  
索されています。仏壇は何といっても漆でなければ  
と言う日本民族の思いは、深いものがあります。こ  
の作品はそういった時代のニーズにこたえる提案  
でありましょう。朱と黒を基調としたシンプルなデ  
ザインに親しみがにじみ出ている、好感がもてま  
す。





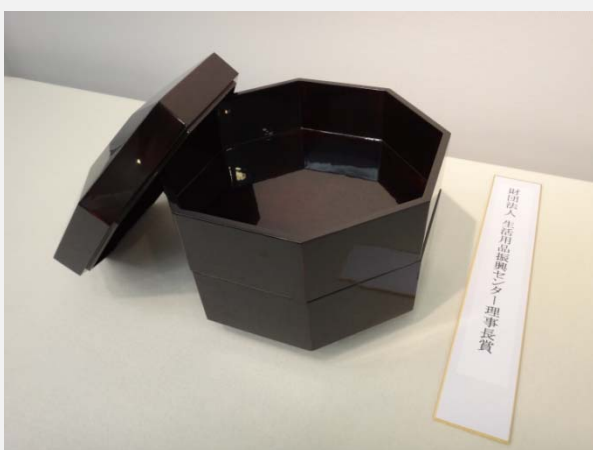
日本放送協会会長賞  
[研出組鉢(5ヶ)]  
後藤 常夫(鳴子)

黒漆を基調とし、周囲の立上がり部分に線筋状の研出し模様を配し、鉢として多目的に利用が楽しめる作品である。この器の魅力あげるとすれば、筋模様の素朴な表現に独特な漆味を出しているところであろうか。



株式会社商工組合中央金庫社長賞  
[八角シリーズ]  
上野 和成(高岡)

八角形という幾何学形態の中でのクールな表現に、現代感覚を求めているように見受けられる。すべて直線と薄手の平面によっていて、黒漆無地に主張がある。かすかな和紙味に漆器らしさを見るが、さらに漆ならではの趣を加味してほしい。



財団法人生活用品振興センター理事長賞  
[栃杣木地呂 喰籠]  
高野 順一(越前)

まず木地呂漆の独特な風合いと栃杣のやわらかいかすかな起伏が見る眼を引きつけてはなさない。滋味な色調だが深い魅力をたたえている。使ってみてはじめて本当の良さがわかる玄人好みの傑作である。



日本漆器協同組合連合会理事長賞  
[薔薇の器 ピンク・赤・紫・黒]  
浅野 道子(香川)

バラの花を題材とした、木制重ね器の造形は、誰もが思い付く発想ではあるが、いざ実際に形にすることになると大変むづかしい。チャレンジャー精神を高くしたい。結果花びらの軽快さが不足しているが、今後の研究にきたいしたい。